

基礎看護技術習熟に関する学生の認識と達成度についての研究

—基礎看護技術テスト後の質問紙調査—

成瀬かおる・白尾久子・網野寛子・中根洋子

帝京平成大学 ヒューマンケア学部看護学科

Students' awareness of acquiring basic nursing skills and their achievement levels

— A questionnaire survey performed after a test of basic nursing skills —

NARUSE Kaoru, SHIRAO Hisako, AMINO Hiroko and NAKANE Yoko

Department of Nursing, Faculty of Human-Care, Teikyo Heisei University

Abstract

We conducted a questionnaire survey involving 108 students in their second year of studying at the nursing department of T University who received a nursing skill test to determine factors influencing their awareness of skill acquisition. The results revealed that: 1) students whose favorite subject was nursing skills showed sufficient self-training, while those whose favorite subject was class work benefited from a mastery learning and felt the importance of points to be noted and the necessity of eagerness to learn; and 2) students with self-awareness that they were skillful undertook sufficient prior learning and self-training and were aware of their success in terms of safety, well-being, attention, and communicating with others. After receiving the test, all students realized their weak skills and the necessity of being aware of this, ability to make decisions, knowledge, and advancing their skills. Repeated self-training in nursing skills facilitates the acquisition of fundamental techniques but does not improve a student's abilities related to emotion/will, such as involving making decisions and attention required for safety and well-being. The study suggests the necessity of improving education methods, coaching systems, and training environments in order to acquire nursing skills to enhance nursing practice abilities.

キーワード：看護技術，達成度，技術練習，学生認識。

1. はじめに

平成23年、厚生労働省から「看護教育の内容と方法に関する検討会」報告書が出され、看護師の実践能

力の充実の一端として、看護職者が免許取得前に学ぶべき事項（厚生労働省、2011）の整理がなされた。「看護師に必須の技術項目と卒業時の到達度」が明らかになり、看護技術を支える要素として、医療安全のため

に、患者および家族への説明と助言、的確な看護判断と適切な看護技術の提供が謳われ、看護師基礎教育においても技術教育の更なる充実（日本看護系大学協議会看護実践能力検討委員会、2002）が求められている。

看護技術の習熟度の確認については、市川らの技術チェックは学生の看護技術実践の自信度を高められる（市川、2012）報告がある。

まず、A 大学の最初の看護技術の確認は、基礎看護学実習に向けて学生の習熟度を把握するために、看護技術テストが実施されている。学生は基礎看護学の学内実習の授業終了後に自己学習時間で技術の手順だけでなく、対象への接し方や気遣いなどの態度面の向上も含めて日々練習を重ねている。しかし、臨地実習前の学生は看護技術の手順どおり行うことに集中し、患者の思いや気遣い、根拠や留意点を明確にした技術が実践できているかどうかは不明である。

そこで、基礎看護学実習に向けて実施される看護技術テスト後に学生の認識を調査し、看護技術習得に影響する要素（看護技術習得に結びつく器用さなどの特性・根拠や倫理的裏付け・その場での判断能力・学習意欲・練習量・動機づけなど）を探りたいと考えた。

この研究の結果は、今後の学生の看護技術の習熟度に向けて指導及び環境を整えるうえで示唆が得られると考える。

2. 研究目的

看護技術テストを体験した学生の認識（学習意欲・態度・自己練習・判断能力など）及び技術の習熟度や技術習得に影響する要因を明らかにする。

3. 研究方法

- 1) 研究期間 平成 24 年 9 月～ 26 年 10 月
- 2) 研究対象 A 大学の看護学科 2 年生 108 名
- 3) 研究方法 質問紙による記述調査、看護技術チェック・事後学習終了後、学生は待機教室の教卓上の質問紙に記載後、別室の閉鎖式ボックスに提出した。
- 4) 調査内容

筆者らが作成した質問肢 18 項目（1. 技術習得に影響する項目 5 項目、2. 自己練習回数、3. 看護技術実施後の認識）に対して 4 件法にて（大いにそう思う、そう思う、そう思わない、全くそう思わない）回答を求めた。

5) 分析方法

データ分析方法は、技術習得に関連する要因の認識に関連する要因は、「はい・いいえ」の 2 群に分け単純集計を行なった。また実施後の学生の認識結果は「大いにそう思う・そう思う・そう思わない・全くそう思わない」を単純集計した。

そして、「技術習得に影響する項目」と「看護技術実施後の認識」の 2 区分に違いがあるか検討するために、独立サンプルの検定を行なった。分析は、統計ソフト SPSS.22.0 for Windows を使用し、有意水準は 1%～5% とした。

4. 倫理的配慮

平成 24 年 12 月 T 大学倫理委員会の承認を得ている。（承認番号 24-039）

質問紙への回答について、看護技術チェック実施オリエンテーション後に、口頭で説明・依頼した。

説明内容は、目的・方法・無記名・研究協力は自由意思（無記名なので、研究途中では対処できない）・断っても成績には関係しない・個人が特定されない統計的处理・データは本研究のみ使用・データは鍵戸棚に保管・終了後速やかにシュレッダー処理等・記載された質問紙を提出されたことで、研究に同意されたと判断する。

5. 用語の定義

1) 看護技術テスト：初めて基礎看護学実習に臨む学生の看護技術の習熟度を確認するために実施している。看護技術テスト項目は、リネン交換・体位変換・清拭・寝衣交換・バイタルサイン測定・滅菌手袋の装着脱である。

2) マスタリー学習：マスタリー学習とは、1968 年にブルーム（B.bloom）によって規定された完全習得学習アプローチである。ブルームアプローチは、ほとんど全ての学生が指定された学習レベルになるようにデザインされた教育的なストラテジー（Gronlund、1974）であり、①小集団研究セッション（2・3 人の学生）で行う。②個々の個別指導をする。③再実施する教育指導などを取り入れる。

技術テスト時期が、基礎看護技術授業との期間が空いているため、自己練習で気づいた疑問点や不明点を解決するために、教員が空き時間に練習に立ち合いマ

ストーリー学習による強化指導を行っている。

6. 結 果

回収率：108 名に配布し、106 名 (98%) の回収であったが、著しく信頼数の欠けるデータを除外し、有効回答数 102 名 (96.2%) を分析対象とした。

1) 技術習得に関連する認識結果

看護技術習得に関連する要因の学生の認識結果は、「基礎看護学の科目が好き」と「家事をしている」学生は 6 割以上であった。「手先が器用」学生は 3 割程度であった。しかし「授業が得意」「技術が得意」学生 1 割にも満たなかった (Table1)。

8 項目の看護技術の自己練習回数結果では、学生の練習回数は平均的にばらつきがあったが、20 回以上の練習回数がわずかに多かった (Table2)。

技術テスト実施後の学生の認識「事前学習・安全な技術など」結果は、学生の認識全項目が、「大いに思う」「そう思う」とする学生の割合が多かった (Table3)。

2) 技術習得に関連する認識結果の差

技術習得に関連する要因（基礎看護学の科目が好きなど）と技術テスト実施後の学生の認識（事前学習が十分など）の t 検定で独立サンプルの検定を行なった。

基礎看護学の科目が好きか嫌いかの違いによる群間の差があるか検討するために、「科目が好きか嫌いか」

Table1 技術習得に関連する要因の認識結果

		人数 (%)				n=102
		科目が好き	授業は得意	技術が得意	手先が器用	家庭で家事実施
はい	60 (58.8)	7 (6.9)	6 (5.9)	33 (32.4)	70 (68.6)	
いいえ	42 (41.2)	95 (93.1)	96 (94.1)	69 (67.6)	32 (31.4)	

Table2 看護技術自己練習回数結果

	n=99
練習回数	人数 (%)
5回以上	25 (24.5)
10回以上	23 (22.5)
15回以上	23 (22.6)
20回以上	28 (27.5)

Table3 実施後の学生の認識結果

		人数 (%)				n=102
						認識
		おおいにそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない	平均値 (SD)
事前準備	事前学習が十分	6 (5.9)	68 (66.7)	26 (25.5)	2 (2.0)	2.76 .583
	自己練習が十分	11 (10.8)	50 (49.0)	37 (36.3)	4 (3.9)	2.67 .722
	マスター学習が有効	13 (12.7)	43 (42.2)	35 (34.3)	11 (10.8)	2.57 .850
技術実施	安全な技術	20 (19.6)	61 (59.8)	17 (16.7)	4 (3.9)	2.95 .723
	安楽な技術	10 (9.8)	53 (52.0)	33 (32.4)	6 (5.9)	2.66 .738
	相手を気遣う	17 (16.7)	61 (59.8)	21 (20.6)	3 (2.9)	2.9 .697
	声かけ・同意を得る	28 (27.5)	58 (56.9)	14 (13.7)	2 (2.0)	3.1 .697
振り返り	技術力未熟さを実感	80 (78.4)	20 (19.6)	2 (2.0)		3.76 .470
	患者の思いを想像	13 (12.7)	70 (68.6)	17 (16.7)	2 (2.0)	2.92 .608
	根拠の大切さ	45 (44.1)	51 (50.0)	6 (5.9)		3.38 .598
	留意点の大切さ	53 (52.0)	45 (44.1)	4 (3.9)		3.48 .576
学び・気づき	意欲の大切さ	56 (54.9)	44 (43.1)	1 (1.1)	1 (1.0)	3.52 .576
	判断力の必要性	60 (58.8)	40 (39.2)	2 (2.0)		3.57 .536
	技術の必要性	76 (74.5)	23 (22.5)	3 (2.9)		3.72 .515
	専門知識の必要性	65 (63.7)	35 (34.3)	2 (2.0)		3.62 .527
	スキルの必要性	74 (72.5)	27 (26.5)	1 (1.1)		3.72 .475
試験方法	試験内容	15 (14.7)	60 (58.8)	24 (23.5)	2 (2.0)	2.87 .673
	試験時期	10 (9.8)	47 (46.1)	29 (28.4)	16 (15.7)	2.5 .876
	試験実施方法	12 (11.8)	43 (42.2)	35 (34.3)	12 (11.8)	2.54 .852

を独立変数に、「事前学習、自己練習など」を従属変数とした t 検定を行なった。マスタリー学習は、「科目が嫌い」群に比べ、「科目が好き」群の方が有意に差が見られた。 $(p<.01)$ 。「留意点」「意欲」も、「科目が嫌い」群に比べ、「科目が好き」群の方が有意に高い。 $(p<.05)$ 。各項目の平均値を比べると、「技術安全」「技術安楽」「患者の思い」以外の項目が、「科目が嫌い」群に比べ、「科目が好き」群の方が高い (Table4)。

基礎看護学の授業が得意か不得意かの違いによる群間の差があるか検討するために、「授業が好きか嫌い」を独立変数に、「事前学習、自己練習など」を従属変数として t 検定を行なった。全てに関して有意差はみられなかったが、「マスタリー学習」のみはその傾向を伺うことができた。各項目の平均値を比べると、「事前学習」「技術力の未熟さを実感」「技術の必要性」「専門知識の必要性」「スキルの必要性」以外の項目が、「授業が不得意」群に比べ「授業が得意」群の方が高かった (Table5)。

看護技術が得意か不得意かの違いによる群間の差を検討するために、「技術が得意か不得意か」を独立変数に、「事前学習・自己練習など」を従属変数として

t 検定を行なった。「自己練習が十分」「安楽な技術」は、「科目が嫌い」群に比べ、「科目が好き」群の方が有意に差がみられた。 $(p<.05)$ 。「事前学習」から「患者の思いを想像」までの9項目の平均値を比べると、「科目が嫌い」群に比べ、「科目が得意」群の方が高かった。しかし、「根拠が大切」から「スキルの必要性」までの6項目の平均値を比べると、「技術が不得意」群に比べ「技術が得意」群の方が高かった (Table6)。

手先が器用か不器用かの違いによる群間の差を検討するために、「手先が器用か不器用か」を独立変数に、「事前学習・自己練習など」を従属変数として t 検定を行なった。「自己練習が十分」「安楽な技術」「安楽な技術」は、「手先が不器用」群に比べ、「手先が器用」群の方が $(p<.05)$ 有意に高かった (Table7)。

各項目の平均値を比べると、「声掛け・同意を得る」「技術力の未熟さを実感」「意欲の大切さ」「専門知識の必要性」「意欲の必要性」以外の項目が、「手先が不器用」群に比べ、「手先が器用」群の方が平均点が高かった。

家庭で家事をしているか家事をしていないかの違いによる群間の差があるか検討するために、「家事をし

Table4 「科目が好きか嫌い」 t 検定結果

	科目好き群		科目嫌い群		t 値 (df)	p 値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)		
事前学習	2.80	(.576)	2.71	(.596)	.729 (100)	.468
自己練習	2.78	(.761)	2.50	(.634)	1.978 (100)	.051
マスタリー学習	2.75	(.816)	2.31	(.841)	2.651 (100)	.009 **
技術安全	2.90	(.796)	3.02	(.604)	-.850 (100)	.397
技術安楽	2.63	(.802)	2.69	(.643)	-.383 (100)	.702
相手を気遣うことができた	2.90	(.730)	2.90	(.656)	-.034 (100)	.973
声かけ・同意を得る	3.13	(.724)	3.05	(.661)	.610 (100)	.543
技術力未熟さ	3.78	(.490)	3.74	(.445)	.476 (100)	.635
患者の思い	2.92	(.645)	2.93	(.558)	-.097 (100)	.923
根拠	3.43	(.533)	3.31	(.680)	1.030 (100)	.306
留意点	3.60	(.494)	3.31	(.643)	2.578 (100)	.011 *
意欲	3.64	(.486)	3.36	(.656)	2.443 (100)	.016 *
判断力	3.63	(.486)	3.48	(.594)	1.414 (100)	.161
技術の必要性	3.80	(.443)	3.69	(.587)	1.911 (100)	.060
専門知識	3.68	(.469)	3.52	(.594)	1.452 (100)	.151
スキルの必要性	3.77	(.427)	3.64	(.533)	1.251 (100)	.215

** $p<.01$ * $p<.05$

Table5 「授業が得意か不得意か」*t* 検定結果

n=102

	授業が得意群		授業が不得意群		<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	p値
	平均値	(<i>SD</i>)	平均値	(<i>SD</i>)		
事前学習が十分	2.57	(.535)	2.78	(.587)	-.908 100	.366
自己練習が十分	2.57	(.535)	2.67	(.736)	-.360 100	.720
マスター学習が有効	3.14	(.900)	2.53	(.836)	1.874 100	.064
安全な技術	3.29	(.488)	2.93	(.733)	1.274 100	.206
安楽な技術	2.86	(.378)	2.64	(.757)	1.323 100	.215
相手を気遣う	3.29	(.756)	2.87	(.688)	1.520 100	.132
声かけ・同意を得る	3.43	(.787)	3.07	(.688)	1.305 100	.195
技術力未熟さを実感	3.57	(.535)	3.78	(.465)	-1.128 100	.262
患者の思いを想像	3.00	(.577)	2.92	(.613)	.352 100	.726
根拠の大切さ	3.43	(.787)	3.38	(.587)	.211 100	.833
留意点の大切さ	3.57	(.535)	3.47	(.581)	.432 100	.667
意欲の大切さ	3.57	(.535)	3.52	(.581)	.246 100	.806
判断力の必要性	3.57	(.535)	3.57	(.539)	.014 100	.989
技術の必要性	3.57	(.535)	3.73	(.515)	-.767 100	.445
専門知識の必要性	3.57	(.535)	3.62	(.530)	-.239 100	.811
スキルの必要性	3.57	(.535)	3.73	(.471)	-.832 100	.407

***p* < .01 **p* < .05Table6 「技術が得意か不得意か」*t* 検定結果

n=102

	技術が得意群		技術が不得意群		<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	p値
	平均値	(<i>SD</i>)	平均値	(<i>SD</i>)		
事前学習が十分	3.00	(.632)	2.75	(.580)	1.019 100	.311
自己練習が十分	3.17	(.408)	2.64	(.727)	1.767 100	.022 *
マスター学習が有効	2.83	(.983)	2.55	(.844)	.785 100	.435
安全な技術	3.33	(.516)	2.93	(.729)	1.341 100	.183
安楽な技術	3.33	(.516)	2.61	(.731)	2.367 100	.020 *
相手を気遣う	3.33	(.816)	2.88	(.684)	1.575 100	.118
声かけ・同意を得る	3.50	(.548)	3.07	(.700)	1.465 100	.146
技術力未熟さを実感	3.50	(.548)	3.78	(.463)	-1.428 100	.156
患者の思いを想像	3.00	(0.00)	2.92	(.627)	.324 100	.196
根拠の大切さ	3.17	(.408)	3.40	(.607)	-.910 100	.242
留意点の大切さ	3.17	(.408)	3.50	(.580)	-1.382 100	.106
意欲の大切さ	3.33	(.516)	3.53	(.580)	-.816 100	.417
判断力の必要性	3.33	(.516)	3.58	(.536)	-1.110 100	.270
技術の必要性	3.50	(.548)	3.73	(.518)	-1.059 100	.292
専門知識の必要性	3.50	(.548)	3.63	(.528)	-.561 100	.576
スキルの必要性	3.50	(.548)	3.73	(.470)	-1.149 100	.253

***p* < .01 **p* < .05

Table7 「手先が器用か不器用か」*t* 検定結果

n=102

	手先が器用群		手先が不器用群		<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	<i>p</i> 値
	平均値	(<i>SD</i>)	平均値	(<i>SD</i>)		
事前学習が十分	2.94	(.609)	2.68	(.556)	2.128 100	.036 *
自己練習が十分	2.82	(.727)	2.59	(.714)	1.474 100	.144
マスタリー学習は有効	2.58	(1.001)	2.57	(.776)	.053 100	.958
安全な技術	3.27	(.626)	2.80	(.719)	3.254 100	.002 *
安楽な技術	2.94	(.659)	2.52	(.740)	2.877 100	.005 *
相手を気遣う	3.09	(.678)	2.81	(.692)	1.919 100	.058
声かけ・同意を得る	3.27	(.626)	3.01	(.717)	1.770 100	.080
技術力未熟さを実感	3.73	(.517)	3.78	(.449)	-.554 100	.581
患者の思いを想像	3.00	(.559)	2.88	(.631)	.900 100	.370
根拠の大切さ	3.55	(.564)	3.30	(.602)	1.931 100	.056
留意点の大切さ	3.55	(.506)	3.45	(.607)	.788 100	.433
意欲の大切さ	3.42	(.663)	3.57	(.528)	-1.159 100	.249
判断力の必要性	3.61	(.496)	3.55	(.557)	.486 100	.628
技術の必要性	3.67	(.596)	3.74	(.474)	-.663 100	.509
専門知識の必要性	3.60	(.556)	3.62	(.517)	-.153 100	.879
スキルの必要性	3.73	(.452)	3.71	(.488)	.170 100	.866

***p* < .01 **p* < .05

ているか家事をしていない」を独立変数に、「事前学習・自己練習など」を従属変数として *t* 検定を行なった。「声掛け・同意を得る」が「家事をしていない」群より「家事をしている」群の方が有意に差がみられた (*p* < .01)。

各項目の平均値を比べると、「マスタリー学習」以外の項目が、「家事をしていない」群に比べ、「家事をしている」群の方が 平均値が高かった (Table8)。

対象者の特性と科目が好き・授業が得意等の関連要因の検討を行なうために、相関分析を行った。

「授業が得意と技術が得意」「授業が得意と手先が器用」「科目が好きとマスタリー学習」「手先が器用」「事前学習が十分」「技術練習回数と事前学習が十分」は、1% 水準から 5% 水準の相関がみられた。

「技術練習回数と自己練習が十分」「事前学習と自己練習が十分」は、中程度の強さであるが 1% 水準の相関がみられた (Table9)。

「安楽な技術」は「相手を気遣う・声掛け・同意ができる・技術力の未熟さ実感・熟練技術の必要」

が、「患者の思いを想像」は「相手を気遣う・声掛け・同意ができる」が、「技術の未熟さを実感」は「根

拠の大切さ・留意点の大切・意欲の大切さ・判断力の必要性・熟練技術の必要性・専門知識の必要性」が、「患者の思いと留意点の大切さ」「根拠の大切さ」は「意欲の大切さ・判断力の必要性・熟練技術の必要性・専門知識の必要性・スキルの必要性」が、「留意点の大切さ」は「意欲の大切さ・熟練技術の必要性・専門知識の必要性・スキルの必要性」などに 1% 水準から 5% 水準の相関がみられた。

「安全な技術」は「安楽な技術・相手を気遣う・声掛け・同意を得る」が、「相手を気遣うと声掛け・同意ができる」「技術力の未熟さとスキルの必要性」「根拠の大切さと患者の思いを想像」「判断力の必要性和留意点の大切さ」が、「意欲の大切さ」は「判断力の必要性・熟練技術の必要性・専門知識の必要性・スキルの必要性」が、「判断力の必要性」は「熟練技術の必要性・専門知識の必要性・スキルの必要性」が、「熟練技術の必要性」は「専門知識の必要性・スキルの必要性」などに中程度の強さであるが 1% 水準の相関がみられた。「根拠の大切さと留意点の大切さ」「専門知識の必要性和スキルの必要性」は、1% 水準の高い相関がみられた (Table10)。

Table8 「家事をしているかしていないか」*t*検定結果

n=102

	家事をしている群		家事をしていない群		<i>t</i> 値(<i>df</i>)	p値
	平均値	(<i>SD</i>)	平均値	(<i>SD</i>)		
事前学習が十分	2.81	(.597)	2.66	(.545)	1.274 100	.206
自己練習が十分	2.71	(.725)	2.56	(.716)	.985 100	.327
マスタリー学習が有効	2.51	(.830)	2.69	(.896)	-.954 100	.342
安全な技術	3.01	(.732)	2.81	(.693)	1.313 100	.192
安楽な技術	2.69	(.772)	2.59	(.665)	.582 100	.562
相手を気遣う	2.96	(.690)	2.78	(.706)	1.186 100	.239
声かけ・同意を得る	3.23	(.641)	2.81	(.738)	2.900 100	.005 **
技術力未熟さを実感	3.81	(.392)	3.66	(.602)	1.360 100	.181
患者の思いを想像	3.00	(.565)	2.75	(.672)	1.953 100	.054
根拠の大切さ	3.40	(.623)	3.34	(.545)	.439 100	.661
留意点の大切さ	3.49	(.608)	3.47	(.507)	.137 100	.891
意欲の大切さ	3.53	(.607)	3.50	(.508)	.230 100	.817
判断力の必要性	3.63	(.516)	3.44	(.564)	1.686 100	.095
技術の必要性	3.74	(.472)	3.66	(.602)	.787 100	.433
専門知識の必要性	3.66	(.508)	3.53	(.567)	1.120 100	.265
スキルの必要性	3.79	(.413)	3.57	(.564)	2.005 100	.051

***p* < .01 **p* < .05

Table9 技術に影響する要因間の相関

n=102

	科目好き	授業得意	技術得意	手先器用	家庭家事	技術練習回数	事前学習が十分	自己練習が十分	マスタリー学習が有効
科目好き	1								
授業得意	.148	1							
技術得意	.040	.262**	1						
手先器用	.110	.310**	.183	1					
家庭家事	-.179	.016	.079	.197*	1				
技術練習回数	-.176	-.006	-.174	-.123	-.112	1			
事前学習が十分	-.073	.090	-.101	-.208*	-.126	.256*	1		
自己練習が十分	-.194	.036	-.174	-.146	-.098	.483**	.470**	1	
マスタリー学習が有効	-.256**	-.184	-.078	-.006	.095	.046	-.107	.005	1

***p* < .01 **p* < .05

Table10 技術の認識に対する要因間の相関

n=102

	安全な技術	安楽な技術	相手を気遣う	声かけ・同意を得る	技術力未熟さを実感	患者の思いを想像	根拠の大切さ	留意点の大切さ	意欲の大切さ	判断力の必要性	技術の必要性	専門知識の必要性	スキルの必要性
安全な技術	1												
安楽な技術	.618**	1											
相手を気遣う	.443**	.300**	1										
声かけ・同意を得る	.482**	.394**	.550**	1									
技術力未熟さを実感	-.093	-.235*	-.011	.101	1								
患者の思いを想像	.126	.072	.309**	.275**	.073	1							
根拠の大切さ	-.025	-.036	.067	.028	.253*	.437**	1						
留意点の大切さ	-.086	-.121	-.030	.030	.275**	.335**	.813**	1					
意欲の大切さ	.014	-.019	.054	.069	.237*	.061	.395**	.375**	1				
判断力の必要性	.073	-.103	.071	.167	.340**	.077	.365**	.422**	.605**	1			
技術の必要性	.015	-.207*	.087	.161	.293**	-.009	.196*	.198*	.470**	.664**	1		
専門知識の必要性	-.024	-.061	.086	.049	.392**	.029	.280**	.285**	.563**	.567**	.471**	1	
スキルの必要性	-.041	-.168	.095	.145	.451**	.059	.212*	.287**	.437**	.642**	.639**	.788**	1

***p* < .01 **p* < .05

7. 考 察

1) 学生の認識と学習意欲

6割弱の学生が基礎看護学の科目が好きであると回答していることは、反復練習など看護技術修得に効果的な影響がある。しかし、授業や技術が得意と認識する学生が少ない状況を見ると、看護技術テストを受けるために練習をしている。一方、科目が好きと意欲の必要性や留意点の大切さに有意差がみられたことから、科目が好きという学生の認識は意欲につながっていると解釈できる。

「意欲の大切さ」が「判断力・熟練技術・専門知識・スキルの必要性」と中程度の相関がみられたことをみると、これらは看護技術テストを通じて認識できたものと思われる。しかし、科目の好き嫌いの2群の平均値を比較すると、「科目好き」群学生が、「科目嫌い」群学生の方が高かった項目「安全技術」「安楽な技術」「患者の思いを気遣う」を不十分と認識しているなど謙虚な自己評価をしていると考える。

2) 技術練習と認識

8項目の看護技術を習得するためには、練習回数は必要である。手先が器用な学生は3割程度であり、「自己練習十分・事前学習十分」「マスタリー学習が効果的・安全安楽な技術・気遣い・声掛け・同意を得る」に対する認識はやや不十分と感じている面がみられる。

高橋らは、現在は生活に使用される物品が次第に便利なものを多用するようになってきたため、・・・(中略)・・・年々、看護技術到達まで、練習や訓練の回数が増えていることは見逃せない事実である。(高橋、1992)と述べている。本研究では技術練習回数と事前学習・自己練習が十分と認識している点では、弱い相関があるが、手順など基本動作の事前学習や反復練習は十分でも、安全・安楽な技術に関連する気遣い・声掛け同意など情意領域を含めた実施は難しい状況が分った。鈴木らは、連動動作、観察力、手先の器用さ、洞察力、判断力が求められる技術は、練習回数が増しても正答率が低く、自己練習の限界を示している(鈴木、1991)と述べている。つまり学生の自己練習だけでは、専門知識に裏づけられ、患者の反応を確認しその思いに配慮しつつ、安全・安楽な技術までに高めることは困難であり、マスタリー学習の必要性がある。

学生は、日々過密な授業などカリキュラムが進む中、自己学習時間で反復練習を進めていかなければならな

い。そして、学生人数と比較し練習時間が制限され演習ベッド等の不足、マスタリー学習が授業時間と重なって受けられなかったという意見をみると、練習環境が不十分だったと推察できる。今後、学生の練習環境を整えていくことが必須である。

3) 技術習得に関連する達成度

技術テスト実施後の学生の気づきや学びの認識は大いにそう思う項目が多かった。学生は技術テストを通して、自己の技術の未熟さや相手を気遣い声掛けや同意を得て実施したかなど振り返り、判断力や熟練した技術、専門知識やスキルの必要性に気づいている。

技術習得は、基礎科目が好き・授業が得意・科目が好きな学生は、マスタリー学習を有効と感じており、個別指導の有効性があったといえる。授業科目が好きな学生は留意点の大切さや意欲に有意差がみられ、学習意欲があると推察できる。技術が得意な学生は自己練習や安楽な技術に有意差がみられ、技術習得に前向きであると考ええる。

また、手先が器用な学生が事前学習や安全安楽な技術に有意差がみられ、技術の実践に意欲的である。しかし、手先が器用・不器用の2群の平均値を比較すると、「手先不器用」群が高い「意欲の大切さ・熟練技術や専門知識の必要性」は、手先が器用な学生が技術はできても裏付けなどが浅くなる傾向があると推察できる。

家事をしている学生は声掛け・同意に有意差がみられ、相手とのやり取りができるといえる。しかし、家事は先を見越して段取りをして進める効率性は養われるが、緻密な技術や専門知識に基づき、患者の反応を確認しながら安全・安楽な技術実施する能力の育成は難しいと考える。

相関結果では、安楽な技術は相手を気遣い、声掛け・同意を得る、技術力の未熟さ実感し、熟練技術の必要性に相関がみられ、患者の思いを想像し相手を気遣い、声掛け・同意を得ることはできる。一方、技術の未熟さを実感し、熟練根拠・留意点・意欲の大切さ、判断力・専門知識の必要性を感じている認識が相関していた。また、根拠・留意点の大切さは、意欲・判断力・熟練技術・専門知識・スキルの必要性が相関し、判断力の必要性は、熟練技術・専門知識・スキル必要性に相関がみられた。いずれも、この相関結果は学びや気づきなど同様な項目間の関連であり、安全安楽に必要な判断力や気遣いなど情意領域の相関はみられない。

つまり、学生は基本的な手技に関する反復練習に留まり、判断力、気遣いや声掛け及び患者の思いを受け止めるまでの技術に到達していないと考えられる。

本研究の対象学生は、臨地実習前の状況であり、情意領域や運動領域の能力まで到達していないが、今後履修する臨地実習を通して習熟していくと考えられる。看護技術を高めるための練習方法になるよう、教育方法を工夫していく必要がある。

8. おわりに

看護技術評価を体験した学生の認識や技術習得に影響する要因を調査し以下のことが分った。

- 1) 技術が得意な学生は、自己練習を十分と認識していた。
- 2) 実施後は、未熟さを感じ留意点・判断力・知識・スキル等の必要性を認識していた。
- 3) 科目が好きな学生は、マスタリー学習が有効と感じ、留意点の大切さや意欲の必要性に気づいていた。
- 4) 手先が器用な学生は、安楽・安全に出来たと認識していた。
- 5) 家事をしている学生は、声かけや同意を得て実施できたと認識していた。
- 6) 事前学習や自己練習すると、安全・安楽・気遣い・声掛けにつながると認識していた。
- 7) 自己練習と通して、基本的な手技は達成できているが、安全安楽に必要な判断力や気遣いなど情意領域の育成には到達していなかった。

今回は、臨地実習前の学生で、看護技術テスト実施前後の比較でなく、実施後のみの結果であり、一般化するには限界がある。今後は、看護技術を高める看護技術習得に向けて、教育方法及び指導体制や練習環境を整えていく必要性が示唆された。

今後も、認知・情意・精神運動領域や専門知識の裏づけ、患者の反応に配慮した安全・安楽な看護技術の達成度を確認する研究を継続していきたい。

謝 辞

本研究に協力頂きました学生の皆様に心より感謝いたします。また、本研究の分析にご助言頂きました横浜創英大学看護学部 井上真弓先生に感謝いたします。

引用文献

- 1) 「看護教育の内容と方法に関する報告書」について (2011)、平成 23 年 2 月 28 日、厚生労働省医政局看護課、294-295、看護教育、52 (4)
- 2) 日本看護系大学協議会看護実践能力検討委員会 (2002): 「看護学教育の在り方に関する検討会報告」、平成 14 年 3 月 26 日
- 3) 市川恭子・佐久間佐織・小澤香奈恵 (2012): 状態不安に看護技術実践の自信度と技術テストが及ぼす影響、日本看護学教育学会第 22 回学術集会講演集、302
- 4) Norman E. Gronlund (1974): INDIVIDUALIZING CLASSROOM INSTRUCTION、9-14
- 5) 鈴木信子・川畑安正 (1991): 点滴中の寝衣交換技術」の反復練習にみる修得内容の変化、「点滴中の寝衣交換技術」の要素行動の評価を試みて、日本看護学教育学会誌 (0916-7536)、1 (1)、34-35
- 6) 高橋典子・野村明美・林菜穂子 (1992): 看護学生の手技に関する検討 (2)、日本看護学教育学会誌 (0916-7536)、1 (1)、72-73